2020年9月6日　司祭　越山　哲也
八戸聖ルカ教会

聖霊降臨後第14主日（特定18）　説教

「主の忠告は人間関係を修復するためにある」

〔旧約聖書〕	ｴｾﾞｷｴﾙ書　33:7~11
〔使徒書〕	ﾛｰﾏの信徒への手紙　12:9～21
〔福音書〕	ﾏﾀｲによる福音書18：15～20

主の平和が皆さんと共にありますように。

「人にしてもらいたいと思う事を人にしなさい。人にしてもらいたくないことはしてはいけない。」

「あなた」と「わたし」の人間関係を考える時にまた相手への言葉掛け、行動を起こすときの大切な点だと思います。幼いこどもたちにもこのことを教えます。

本日の福音書に以下のような箇所があります。

ｲｴｽ様の言葉です。「はっきり言っておく。あなたがたが地上でつなぐことは、天井でもつながれ、あなたがたが地上で解くことは、天上でも解かれる。」（ﾏﾀｲ18:18）

分かりやすくいうと「この世界でしてはならないはならないことは神様が支配する国（天の国／神の国）でもしてはならないし、逆にこの世界でしてもいいことは神様が支配する国（天の国／神の国）でもしていいのである。」ということです。

神の国はまさに私たちの現実の只中にあるということですし、また冒頭の人間関係における最も大切な事と響き合っていると思います。

教会と私たちの社会は切り離してはいけません。また、信仰も社会（あなたとわたしの集合体）の中で育まれていくのです。

本日の福音書の冒頭に「兄弟があなたに対して罪を犯したら、行って二人だけのところで忠告しなさい。」（ﾏﾀｲ18:20）とあります。

罪を犯した兄弟とは迷い出た人です。「あなた」と「わたし」の関係から迷い出てしまった人、それは大きいものであれば「裏切り」「搾取」「詐欺」そして「殺人」などに発展していきます。

また、何となく気まずくなってしまったという関係も健全な人間関係とはいえないでしょう。

考えてみれば私たちは常にこの関係性について悩んでいるのではないでしょうか。

現代はこの誰しもが抱える悩みを当事者でない見ず知らずの人間が勝手な正義感に基づいて忠告という名のもとで裁いてしまうことが多すぎると思います。

そんな私たちに本日の福音書は大切なことを教えてくれています。

福音書が語る「忠告」はあなたとわたしの関係を断絶させるものではなくもう一度結びつけるものなのです。「言うこと（忠告）を聞き入れたら、兄弟を得たことなる。」（ﾏﾀｲ 18:15）とあるとおりです。

ｲｴｽ様が教える忠告は「兄弟を得る」ためにすることなのです。

福音書の内容にあわせて選ばれている旧約聖書ｴｾﾞｷｴﾙ書では「彼らに言いなさい。わたしは生きている、と主なる神は言われる。わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ、悪人がその道から立ち返って生きることを喜ぶ。立ち帰れ、立ち帰れ、お前たちの悪しき道から。イスラエルの家よ、どうしてお前たちは死んでよいだろうか。」（ｴｾﾞｷｴﾙ 33:11）とあります。

ここでいう「悪人」はまさにあなたとわたしの関係を阻害し迷い出た人です。私たちの社会はそんな人を全力で裁きにいきます。かくいう私もその思いがないという自信はありません。

神様、そして神の御子ｲｴｽ様はまことに忍耐強く「迷い出た人」が正しい道、つまり真の平和の状態（神の国）を目指す道へと心を入れ替えて戻ってくることを待っておられます。

ｲｴｽ様の忠告は愛に満ちています。たとえどんなに厳しい言葉、態度であったとしてもｲｴｽ様の思いは神の国を目指して歩む兄弟を得ることに尽きます。

だからこそ、教会の名による忠告の意味を正しく理解しなければならないと思います。これを間違うと教会の名によって、キリストの名によって人を裁いてしまいます。

エゼキエル書における神様の思い、そして福音書におけるイエス様の思いは「兄弟を得る」ことです。

私たちは一人では主の思いを理解出来ずに間違った忠告をしつづけてしまいます。

「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」（ﾏﾀｲ 18:20）

「わたし」が神の国の完成のためにその道を歩み続けていくためにも、またその仲間である「あなた」である兄弟を得ていくためにも己の肉の思いによる忠告ではなく、主が教える真の忠告の中において「あなた」と「わたし」の関係を豊かなものにしていきたいと願います。